

**運動の心地よさを味わわせ、表現する力を伸ばす体育・保健体育学習**

— 思いや考えと作用し合う表現をめざして —

**1 体育・保健体育科で願う豊かな学びの姿**

本学校園体育・保健体育科は、昨年度（平成21年度）全国学校体育研究大会島根大会において研究発表及び授業公開を行った。島根県の研究主題「確かな知識と技能を身につけ、学ぶ喜びが味わえる体育学習」のもと、本学校園では「運動の心地よさを味わわせ、追求と習得の力を伸ばす体育学習」をテーマに幼稚園から中学校まで一貫した体育・保健体育学習の研究を行ってきた。本年度からは本学校園研究テーマのもとで教科研究を継続することとなり、体育・保健体育科としては昨年度までの学体研での一貫した教科研究を継続しつつ「思考力・判断力・表現力」に重点をおいた学習活動の実践に努めることとした。中学校では昨年度までも「課題解決力」の育成に主眼を置いた学習活動を進めており、生徒からもその成果が感じられる振り返りが見られた。

…（略）…とび前転は自分で見てみないとどのくらいの高さが出ているかとか、どのくらいの回転の速さなのかが分らないけれど、友だちに少し高さが低いと言われたので、ゴムなどを跳び越えて前転する練習をしました。その成果もあって中間発表会では、一つ一つの技が丁寧にできました。でも、リズムがよくなかったので、技と技とが切れないように技の順番を変えて最後の発表会に向けて練習しました。…（略）…学習カルテを使ったスキルチェックでは、今までしていなかったいろいろな技に挑戦できました。知らなかった技なども先生や友だちの見本を見せてもらってやってみることができたのでよかったです。今回のマットの単元は、今までより積極的に練習することができて、友だちともアドバイスをし合って、練習場所も工夫できたのでとても楽しくできたし、上達したと思うのでよかったです。

（マット運動単元のふりかえり／小学3年児童A）

昨年までの研究において、子どもたちの「やってみたい」という追求の心は本来備わっている欲求の一つであり、この気持ちこそが課題を解決するために考えようとする力、まさに「思考力・判断力」であり、「できる・わかる」ために最も大切であることが実証された。そして、その「追求」の力を呼び起こすために大切なのは「運動の心地よさ」を味わわせることであり、本学校園の子どもたちの良さである興味・関心の高さを活かし、運動に対する欲求を高めることが、課題を解決しようという意欲へとつながると考えた。本年度はその「思いや考え」を全体の場に広める（表現する）ことで、互いに高め合い分かり合える喜びを感じさせ、「やってみたい」という思いを強め、次への意欲づけにつなげたいと考えた。

しかしながら、人間は生まれながらにして運動（体を操ること）においては発達の手続き性が明確であるため、この特性を意識しながら学習内容をいくつかの系統に分け、段階的に学習内容を発展させていけるように学び方の深まりについても段階的にとらえることが必要であると考えた。

これまでの研究を踏まえ、体育・保健体育科において一貫して大事に育てたい力を以下のようにまとめることができる。

[昨年度までにまとめた教科として育てたい力]

何よりも動ける身体の基盤の上に「運動の心地よさ」を味わえることができれば、運動に向かう気持ちは高まり、自然と動き出したり、できるために思考を巡らせたりしながら、さらなる動ける身体

をもつことができるであろうという考えである。そして、その気持ちや感覚は残り、生涯を通じて運動に親しみ、その結果として体力の向上や人とのかかわりが深まるはずである。

加えて、さらに今年度からは今までの遊びや生活、学習経験をもとにして、自分や仲間の課題やその解決方法を考え、その思いや考えを伝えることでお互いの力を高めることができるはずである。

これらの力を身につけた子どもたちに表れる姿は以下のものであると思われる。

[豊かな学びの姿]

- 挑戦する意欲をもっている姿（意欲・耐性）
- 体を動かしたくなる、動くとき気持ちいいと感じる姿（情緒）
- 身体を動かしている姿（技能・体力）
- 運動を習慣的に行っている姿（活用）
- 技能構造を追求し、考えている姿（思考・知識）
- 仲間とかかわっている姿（協力）
- 自分や仲間の姿を観察し、思ったことを言葉や身体をつかって説明している姿（思考・判断・表現）

**2 体育・保健体育科の考える思考力・判断力・表現力**

今回の改訂に向けて、中教審答申では「体育科、保健体育科については、その課題を踏まえ、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し、改善を図る。その際、心と体を一体としてとらえ、健全な成長を促すことが重要であることから、引き続き保健と体育を関連させて指導することとする。また、学習したことを実生活、実社会において生かすことを重視し、学校段階の接続及び発達の段階に応じて指導内容を整理し、明確にすることで体系化を図る。」と示された。体育については、「体を動かすことが、身体能力を身に付けるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動などを通じて論理的思考力をはぐくむことにも資することを踏まえ、それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、基礎的な身体能力や知識を身に付け、生涯にわたって運動に親しむことができるように、発達の段階のまとまりを考慮し、指導内容を整理し体系化を図る。」としている。この中に表れる「集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成する」ことや「論理的思考力をはぐくむ」ことはまさに思考力・判断力・表現力の育成に位置するものであると捉え、本学校園体育・保健体育科では次のように考えた。

- 思考力…技能の習得や健康・安全の維持のために、適切な方法を考える力
- 判断力…技能の習得や健康・安全の維持のために、より適切な方法を考え、選択する力
- 表現力…技能の習得や健康・安全の維持のために考えた方法を、体や言葉を使って表現する力

つまり、思考力とは技能を身につけようとするときなどに自分や友だちの課題を見つけたり、その課題を解決する方法を考えたりできる力である。さらに、判断力は見つけたり・考えたりした思いや考えを整理したり、選択したりすることができる力である。その過程を経て、表現力とは思考・判断した自分の思いや考えを言葉や体を使って伝えることができる力である。つまり、思考力・判断力・表現力は一連のつながりをもった思考の流れであり、うまくいかなければ前に戻って考え直したり、うまくいけば次の学習活動でその過程を応用できたりなど次々と発展していくものと考えている。

### 3 本年度の研究

#### (1) 思考力・判断力・表現力についての11年間のつながり

初等部前期	遊びやたくさんの運動経験をしながら、自分の「やってみたい」という思いをもち、表すことができる。
初等部後期	これまでの運動経験を生かしながら、自分の課題を見つけ、運動のポイントを考え、運動することができる。
中等期	既習の基本的な知識・技能をもとに自分自身や他者の課題を発見し、適切な解決方法を選択したり、考えたり、さらに実践することができる。

体を動かしたいという欲求は、人間が元来生まれた持った欲求の一つであり、初等部前期の時期にはその「ワクワク」感は多くの子どもたちの中に常に沸いているものである。その欲求を大切にすることがもっとできるようになりたいというさらなる欲求へとつながっていくものである。その欲求を継続させるために最も重要になってくるのが子どもたちに「できてうれしい」という気持ちを味わわせ、さらに、「これならできそうだ」という感覚をもたせることである。その経験を積むことが「もっとできるようになりたい」という意欲につながるものである。また、「できそうだ」という感覚を持たせるためには、子どもたちに様々な運動感覚を体感させることもこの時期には大切である。すなわち、初等部前期においては子どもたちの中にある単純に「体を動かしたい」という欲求の元に、実際に動いてみたい、仲間がやっていることに自分も挑戦したい、どうやったらできるのだろうなどの思いを言葉や身体を使って表現できる場を設定し、互いの活動を認め合えることができるようになる。初等部後期になると日頃の運動経験や潜在している運動能力によって差異ができる時期である。「できないからやりたくない」という気持ちをもたせないためにも、初等部前期の「やってみたい」という気持ちが大切である。と考える。

初等部後期になると、できるための手段・コツを考えたり、気づき始めたりする時期である。今まで経験したことのある似たような動きや仲間の動きから何かに気づくことができる（動きの客観的理解）。友だちと動きを観察し合い、そこから気づいた自分や友だちの課題や解決方法を共有し、実践することで「できる」喜びを感じ、次への意欲へとつなげることができる。今までとは異なり、「わかる」という感覚が加わってくる。この時期から過去の経験が生かされた思考や表現が期待できる。

中等部は今まで身につけた知識・理解をもとにして、論理的に物事を捉えたり、説明したりできるようになってくる。自分ではできなくても仲間の動きについて気づき、表現できるようになるのもこの時期である。ペアやグループでの観察や教え合いの場面を学習活動に取り入れることで、自分や仲間の課題を発見し、その課題解決の方法を選んだり、考えたりし、さらにその考えを言葉や身体を使って表現することができる。と考える。

#### (2) 思考力・判断力・表現力を育て高めるための授業づくり

体育・保健体育の学習において思考力・判断力・表現力を高めるためには、次のような工夫によって学級全体で学び合う場面を構想することができる。と考える。

##### ①教師のはたらきかけ

ペアやグループでの活動や話し合いをもとにしながら、その思いや考えを学級（集団）全体へ投げかけ、共有して解決していくような課題の設定が必要である。お互いの考えに思いを巡りやすくするため

には、課題を見つけるための観察の視点を絞ることも必要である。と考える。

また、より多くの人の考えに触れさせ（聴き合う姿）これまでの自分自身の思いや考え、知識と比較することで思考をゆさぶったり、新しい考えを実感できたりするような直接的な教師のはたらきかけが必要である。しかしながら、技能を身につけるためには「コツ」を意識した練習時間を十分確保することが最も大切であることから、短時間での意見の共有化を進められるような場面設定の工夫も大切である。と考える。さらに、練習時間においては個に応じた教師のはたらきかけが技能の習得において重要となってくる。

さらに、学習カードや板書（ホワイトボード）、ふりかえりを工夫し、子どもの思いや考えを全体に表現し、共有できる場を設定する。また、その活動によって子どもの思考の変容や新たな発見を教師が把握できるようにする。

##### ②系統性を意識した単元構成

豊かな表現を生み出すためには、過去にどれだけたくさんの運動を経験してきたかが重要になってくる。また、動きの系統性を意識した単元構成も子どもたちの思考を円滑に引き出すために工夫が必要である。

### 4 成果と課題

どの学年においてもお互いの姿を見つめ合うことは、自分の存在を認められることであり、子どもたちに自信とやる気を与えることが分かってきた。それは運動を継続し、生涯スポーツへとつながっていく、これこそが新学習指導要領がねらうものである。この取り組みによって子どもたちは運動の継続から健康な生活へと意識を変容させていくことができるもの。と考える。

しかしながら、「分かった」という気持ちだけでは意欲の継続は減退していくため、「できた」という喜びを持たせるために、思考・判断し、表現したことを、いかに技能へと結びつけていくかが小中一貫した課題である。子どもたちの中から表れた貴重な思いや考えを、技能のスキルアップへとスムーズにつなげていける学習活動を工夫していくことが最も大切である。と考える。（文責 上田 亜由美）

##### 【参考文献】

- 杉山重利・高橋健夫・園山和夫編 「保健体育科教育法」
- 今関豊一・岡出美則・友添秀則編著 「平成20年改訂 中学校教育課程講座 保健体育」
- 今関豊一・品田龍吉編著 「中学校新学習指導要領の展開 保健体育科編」
- 今関豊一編著 「新学習指導要領対応 体育科・保健体育科の指導と評価」